『藤野先生』と藤野厳九郎（二）

葛谷　登

はじめに（補）

「はじめに」を書いて後、「まえがき」に「魯迅には中国の、あるいはさらに広くアジアのさまざまな課題が凝縮している。その発掘は、それぞれの関心にしたがって、各自が試みるべきであろう。[29]」と書かれた飯倉正平氏『魯迅』の「文献案内」の「三　研究」の箇所の第四十七の文献に一九七六年に新潮社から出版された平川祐弘『夏目漱石―非西洋の苦闘』が挙げられ、『クレイグ先生と藤野先生―漱石と魯迅、その外国体験の明暗』を収める。[30]」と注記されていた。比較文学並びに比較文化を専門とされる平川祐弘氏に魯迅の小説「藤野先生」に言及した論考があることを初めて知った。早速に同書、といっても一九九一年に講談社学術文庫に収められたものを買い求めて繙いてみることにした。

学術文庫版に書かれた劉岸偉氏の「解説」によれば、「本書は四部から成ります。第一部『クレイグ先生と藤野先生』は夏目漱石と迅の留学体験を扱っている研究で、新潮社版原書の約半分の紙幅を占めています。…そし

て本書の題名に示唆されているとおり、この第一部を本書の中心とみてもさしつかえないでしょう。[31]」とある。ここに「本書の中心とみてもさしつかえない」と劉氏の言う第一部は、第一章「夏目漱石とクレイグ先生」、第二章「魯迅と藤野先生」、第三章「魯迅と漱石先生」の三つの部分からなる。このうち、「藤野先生」について述べられているものは第二章と第三章である。

平川祐弘氏は第三章の中で、「魯迅の『藤野先生』は漱石の『クレイグ先生』に刺激されてできた作品なのではなかろうか、『藤野先生』は『クレイグ先生』の創造的模倣なのではあるまいか[32]」という異説を提示する。というのも、平川氏によれば「一方になつかしい藤野先生の思い出があり、しかもそれに、先生の期待にそむいた、礼を欠いたという負目（おいめ）の感情も多少まじっているところへ、漱石の『クレイグ先生』を読んだのなら、作家はやはり執筆の衝動に駆られるものだろう。[33]」だからである。

同様の見解は平川氏が同書の「クレイグ先生と藤野先生」の中で、「漱石と魯迅の間にある種の共感が働いたにちがいないという推定は実は前に『魯迅と伝説』（勁草書房）の著書今村与志雄氏によっても行われていた。[34]」と指摘するように、今村与志雄氏が『文芸日本』の一九五六年十月号に書いた「魯迅と日本文学についてのノート[35]」の中に展開されている。この今村氏の見解が表された箇所は平川氏の『夏目漱石』の中に引用されている。[36]大変重要と思われる部分であるので、敢て冗漫を承知で拙文においてもその前の部分も含めて引用させていただくことにする。

ただ、私は魯迅が漱石の作品に執着していた事実が気にかかる。たとえば、魯迅が訳した日本の小説のうち、漱石の『クレイグ先生』の訳が一番よいと周作人はのべている。魯迅は日本留学中、同国人留学生から

孤立していた。仙台にただ一人、医学を学んでいた時日本学生からは馬鹿に思われ、侮辱された。生活はもちろん楽ではない。そういう中で、藤野厳九郎先生が人間的にかれに接した。かれの作品『藤野先生』における藤野先生像は、レンブラント的光と影を帯びている。子規に「漱石はロンドンで下宿屋の婆さんにいじめられているそうだ」と言わせた、「しがない、みじめな生活」を、わびしい素人下宿の一室で毎日迎えていた漱石が、一週一回、クレイグというアイルランド生まれのシェイクスピア学者の講義を受けたときに感受した「あたたかみ」は、この魯迅は人ごととは思わなかっただろう（傍点、筆者注。特に注記しない限り、以下同じ[37]）。

つまり、ロンドン留学時代に切ない哀れむべき生活を余儀なくされていた漱石がシェイクスピア学者クレイグに出会ったことと日本での孤独な留学生活を送っていた魯迅が解剖学者藤野厳九郎に出会ったことが同一の位相で捉えられているのである。

平川氏の引用は更に続く。その前後の部分まで含めると、今村氏の文章は次のようになる。

森田草平の随筆を読んでいて知ったのだが、漱石は「無人島に一人で住んだら涼しかろ」という俳句を作ったことがあるそうだ。漱石のスウイフトへの理解は、なみなみならぬ共感―「同病相憐れむというような切なる共感」に支えられていたともいう。それと同じ言い方をするなら、魯迅は漱石に対し、同病相憐れむというような切なる共感を持っていたのであろう。両者とも、ニーチェ、ドストエフスキイに対し、それぞれの器量に応じて、魅力を感じていたという共通の事実も注目される。漱石は、今日、ドイツ流の教養小説の主人公的解釈を加えられているが、それはキレイごとの漱石だ。魯迅の愛した漱石は、別の漱石である。町

人的な、反俗的大俗人の、その後の日本文学に継承されなかった漱石である。

魯迅と漱石は、精神的に血縁がある。魯迅が漱石を選んだのは、そのためだ。[38]

魯迅が漱石に対して「同病相憐れむというような切なる共感」を抱いたのは、漱石の内側に形成されていた「町人的な、反俗的大俗人の」性格が魯迅を捕らえてやまず、両者とも個の存在を重視してやまないニーチェやドストエフスキーの文学へ深く感ずるところがあったためでもあったということであろうか。わたくしの熟知せぬところである。[39]

平川氏は今村氏の文章を引用した後で、「漱石はイギリスで、魯迅は日本で、ともに後進国から来た留学生として使命感と重圧感に悩まされた。魯迅は敬愛する漱石がロンドンでつらい生活を送ったことを『文学論』の序などを読んで知った時、漱石に対してますます愛着を覚えたのだろう。そしてその漱石の『クレイグ先生』を訳するうちに、仙台で自分を大事にしてくれた藤野先生が無性に懐しく思い出されもしたのだろう。太宰の『惜別』が魯迅の『藤野先生』をもとに書かれたことは周知の事実だが、その『藤野先生』も漱石の『クレイグ先生』に刺激されてできた作品なのではなかろうか。」と記す。[40]

漱石は江戸の町人文化の精華を享受し和漢の教養に秀でた知識人であり、他方魯迅は二千年に及ぶ儒教文化の重圧を身をもって知る読書人の系譜に列なるものである。彼らは自分たちこそ先進国であるという気概と矜持を胸に秘めて留学生活を送っていた可能性をわたくしなどは想像したくなる。ともかく今村氏と平川氏は漱石のクレイグ先生への心情と魯迅の藤野先生へのそれとが敬慕という一点で重なるということでは見解を同じくするようである。

わたくしは『永日小品』に収められた漱石の「クレイグ先生」の文章と『現代日本小説集』に収められた魯迅の「克萊喀先生」の文章に目を通してみた。[41] 漱石の文章から感じ取れるのは亡き師への畏敬と愛惜の情である。

平川氏は『大英伝記事典』(*Dictionary of National Biography*)(一九二〇年版)の付録(Supplement 1901-1911)の第一巻に記載されたクレイグに関する文章を前掲『夏目漱石』の第一章「夏目漱石とクレイグ先生」のところで抄訳して紹介している。[42] それによれば、クレイグは一八四三年に聖職者の家庭に生まれ、一八六五年にダブリン大学のトリニティー・コレッジを卒業した後、一八七四年にロンドンに渡り、家庭教師の仕事を始めた。一時、ウェールズの大学の英語英文学の教授を務めた。シェイクスピアの善本の作成に余念なく、総合的なシェイクスピア語彙辞典作成のための資料調査に没頭し、一九〇六年に亡くなった。半生をかけた遺稿は出版されることはなかったということである。

このクレイグの仕事に関して平川氏は、「生前にも完成しなかったが、死後も遺稿があまりに不完全な状態だったために、ついに公刊不可能に終わってしまった。そして、クレイグの名もたちまち忘れ去られていった。彼が死んでから五年経った一九一一年に、C.T.Onionsがシェイクスピア字彙を新しく出すのだが……クレイグの名前はもう片隅に退けられてしまっている。[43]」と書き、さらに「…クレイグが打込んだ語彙編集の事業は、学問世界の中にあっては、もっとも正統的な基礎作業である。地味ではあるがクレイグ氏の学問はオーソドックスなものだった。[44]」と述べる。クレイグが没頭した語彙調査は学問上大切な基礎作業であったけれども、遺稿が公刊されなかったばかりに、彼の名前はシェイクスピア研究の世界で忘却の彼方に追い遣られたようなのである。

平川氏から教えられたことを念頭に置いて漱石の「クレイグ先生」を読み返してみた。わたくしは魂の揺さぶ

られるような感動を禁じ得なかった。というのも、わが身を冷静な観察者の地位に置いた一見諧謔的な筆致の裏側に紛うかたなき恩師への切々たる真情が赤裸々に吐露されているように感じたからである。これは東洋の片隅から天に向かって書き上げた珠玉の弔辞ではないであろうか。

漱石はクレイグの身なりや仕事を次のように記す。

先生の白襯衣や白襟を着けたのはいまだかつて見た事がない。いつでも縞のフラネルをきて、むくむくした上靴を足に穿いて、その足を暖炉の中へ突き込むくらいに出して、そうして時々短い膝を敲いて――その時初めて気がついたのだが、先生は消極的の手に金の指輪を嵌めていた。――時には敲く代りに股を擦って、教えてくれる。もっとも何を教えてくれるのか分らない。聞いていると、先生の好きな所へ連れて行って、けっして帰してくれない。[45]

この「むくむくした上靴を足に穿いて……教えてくれる。」という表現に接するとき、カメラのファインダーを暖かい眼差しをもって覗き込む写真家の姿が思い浮かんで来る。ぞんざいで些か無作法な態度として嫌っているのではない。東洋の異邦人に打ち解けて胸襟を開いてくれたことを半ば誇り、半ば喜んでいるのではないであろうか。

漱石は、「先生は自分を子供のように考えていた。君こう云う事を知ってるか、ああ云う事が分ってるかなどと愚にもつかない事をたびたび質問された。[46]」とあるように、クレイグから最初一人の英文学者とは見なされていなかったようである。ところが、漱石とのやり取りを重ねたクレイグは、やがて彼を一廉の研究者と見なすようになったのではないのであろうか。この部分の直後に続く「かと思うと、突然えらい問題を提出して急に同輩

扱に飛び移る事がある。[47]」という文は漱石に対する認識を新たにしたクレイグの態度の変化ぶりを示したもののように感ぜられる。単なる同時並行的な所作ではないであろう。その次の段落の中の「いったい英吉利人は詩を解する事のできない国民でね。そこへ行くと愛蘭人はえらいものだ。はるかに高尚だ。――実際詩を味う事のできる君だの僕だのは幸福と云わなければならない。[48]」という文章から窺えるように、クレイグはある段階から漱石を英詩を解するに充分な力量の持ち主として一目置くようになったと考えられる。最初は極東の孤島からの来訪者として真正面からは相手にしようとしなかったのかも知れないけれども、次第に漱石の語る言葉の端端から彼の英文学の素養が並並ならぬものであることを悟り、共に英文学を語り合う仲間として遇するようになったのではないのであろうか。最初は無頓着であったのが、やがて少しく構えて接するようになったとは考えられないであろうか。

他方、漱石のほうもクレイグに親しく接するようになり、彼のシェイクスピアに関する学識が該博であってその語彙研究が一頭地を抜くものであることをつぶさに知らされるにつれてクレイグへの畏敬の念も次第に篤くなって行ったのではないのであろうか。そこには国籍や民族、および言葉の差を超えた景仰の思いが自ずと形成されて行ったのではないかと推察されるのである。

そのような漱石の気持ちが次に掲げるところに遺憾なく表されている。

こう云う字で原稿を書いたら、どんなものができるか心配でならない。先生はアーデン・シェクスピヤの出版者である。よくあの字が活版に変形する資格があると思う。先生は、それでも平気に序文をかいたり、ノートをつけたりして済している。のみならず、この序文を見ろと云ってハムレットへつけた緒言を読まさ

れた事がある。その次行って面白かったと云うと、君日本へ帰ったら是非この本を紹介してくれと依頼された。アーデン・シェクスピヤのハムレットは自分が帰朝後大学で講義をする時に非常な利益を受けた書物である。あのハムレットのノートほど周到にして要領を得たものはおそらくあるまいと思う。しかしその時はさほどにも感じなかった。しかし先生のシェクスピヤ研究にはその前から驚かされていた。[49]

「アーデン・シャクスピヤ」については金子雄司氏によれば、それは「W・J・クレイグ（一八九九―一九〇六）とR・H・ケイス（一九〇九―一九四四）が編集主幹となって、一八九九年から一九二四年のあいだに刊行された全三十七巻の分冊形式の全集である。…全体としてみれば、ケンブリッジ全集を念頭に置いて、それ以降のシェイクスピア研究を意欲的に取り込もうとしていることは明らかである。」[50]というものである。また、「ハムレットへつけた緒言」については、平川氏『夏目漱石』第一章「夏目漱石とクレイグ先生」に記述がある。それによれば、「これは明らかに漱石が勘違いしたので、クレイグがintroductionを書いたのは『ハムレット』ではなくて『リヤ王』である。」[51]とあるように、「ハムレット」は「リヤ王」の誤りであるようである。確かなところは、クレイグ編集のシェイクスピア全集に収められたクレイグの作成になる『リヤ王』のノートは漱石にとって比類なきほどに「周到にして要領を得たもの」として価値があったということであろう。

「クレイグ先生」はこの直後に次のように続く。少し長いが、重要であると思われるので、そのままここに書き出させていただく。

客間を鍵の手に曲ると六畳ほど小さな書斎がある。先生が高く巣をくっているのは、実を云うと、この四階の角で、その角のまた角に先生にとっては大切な宝物がある。――長さ一尺五寸幅一尺ほどな青表紙の手

帳を約十冊ばかり併べて、先生はまがな隙がな、紙片に書いた文句をこの青表紙の中へ書き込んでは、吝坊が穴の開いた銭を蓄るように、ぽつりぽつりと殖やして行くのを一生の楽しみにしている。この青表紙が沙翁字典の原稿であると云う事は、ここへ来出してしばらく立つとすぐに知った。先生はこの字典を大成するために、ウェールスのさる大学の文学の椅子を抛って、毎日ブリチッシ・ミュージアムへ通う暇をこしらえたのだそうである。大学の椅子さえ抛つくらいだから、七志の御弟子を疎末にするのは無理もない。先生の頭のなかにはこの字典が終日終夜槃桓磅礴しているのみである。[52]

クレイグにとってシェイクスピア語彙辞典作成のために大英博物館へ通って必要な資料調査を行なう時間を確保することが必要であったらしい。彼は大学の教職から離れた。シェイクスピア研究の発展のためという学問的な動機から社会的評価と経済的安定につながる地位を棄て去ることを決意し、肩書きのない荊棘の道に踏み入って行った。当然のことながら手元不如意のこともあり、異国からの一介の留学生に対してすらも、経済的懇請をせざるを得ないことになったのであろう。しかしそこには卑屈な恥じらいはない。志の実現のために人に助力を求めるのは正当なことであるという矜持が彼の精神的支柱としてあったのではないか。

漱石は「前後二巻一頁として完膚なきまで真黒になっている。[53]」ところのクレイグの手で修正されたシュミットの『シェイクスピア語彙辞典』を目の当たりにしている。この辞典は中尾祐治氏によれば、「難解語や特殊語だけでなく、全語彙を包括している点に特色がある。没後グレゴール・ザラツィン（Gregor Sarrazin）による改訂第三版（一九〇二）が出た。[54]」とあるように、当時としてはシェイクスピア作品の語彙辞典の標準と見なされ得るようなものであったらしいので、漱石の驚きたるや一入ではなかったのかと推測される次第である。「自

分はへえと云ったなり驚いてシュミッドを眺めていた。[55]」という具合に、こともなげに漱石の質問を一蹴したクレイグの前に呆然と立ち尽くす以外になすすべを知らなかったのではあるまいか。

果たして規範として広く世に認められた業績を向こうに回して自らの論を構築するためには、相手に勝る学識と『論語』「述而」の「暴虎馮河」的な向こう見ずな勇気[56]、或いは『孟子』「公孫丑上」の「千万人と雖も吾往かむとす」式の知慮に根ざした孤高の勇気を必要とするのではないのであろうか。

それのみならず、権威の側からの外圧に耐え、これを撥ね除け意に介さぬところの強靭なる忍耐力が欠かせない。漱石からシェイクスピア辞典の完成の時期を問われて、クレイグは「いつだか分るものか、死ぬまでやるだけの事さ[57]」と答えている。これについて平川氏は、「『死ぬ迄遣る丈の事さ』と漱石に言ったその仕事が、いつまでたっても終らず、しかもそれに自分が打込める、ということがクレイグ氏のやや偏狭な職人気質にはきっと向いていたのだろう。そして江戸っ子の漱石もクレイグ氏のそのような職人気質が好きだったのだろう。[58]」と述べて、クレイグの言葉に東西を貫通する「職人気質」の風尚を見て取る。そこには納得の行く作品が出来上がるまでは何度失敗しても創作の業をとめない打算を超えた世界が現存する。

果たして、漱石が「死ぬまでやるだけの事さ」と訳したところの英語の文句がどのようなものであったのであろうか。というのも、「死ぬまでやるだけの事さ。」という言い方は、わたくしには『論語』「泰伯」の七番めに現われるところの「曾子曰、士不可以不弘毅、任重而道遠、仁以爲己任、不亦重乎、死而後已、不亦遠乎[59]、」という箇所―金谷治氏による書き下しでは「曾子の曰わく、士は以て弘毅ならざるべからず。任重くして道遠し。仁以て己れが任と為す、亦た重からずや。死して後已む、亦た遠からずや。[60]」となり、同氏による訳では「曾子

がいわれた、『士人はおおらかで強くなければならない。任務は重くて道は遠い。仁をおのれの任務とする、なんと重いじゃないか。死ぬまでやめない、なんと遠いじゃないか。[61]」となる――を想起させるものだからである。ちくま文庫『夏目漱石全集10』に附された吉田精一氏の「『則天去私』を翹望しつつ」と題された「解説」によれば、「永日小品」は朝日新聞に一九〇九年（明治四二年）の一月一四日から二月一四日にわたって発表されている。明治の末年にあたり、このころは知識人の教養は四書五経の中国古典であったろう。成人するくらいには『論語』や『孟子』の中の代表的な語句は暗唱していたことと思われる。明治末期の漱石の読者が同様な連想をしたと想像するのもあながち付会の域に入らぬのではないか。また漱石自身、漢詩を創作するなど漢学に造詣の深い人であったようである。英語に達意の漱石が英文を前にして呻吟すること数日にして思い至った幾つかの訳文のうち、幼少より慣れ親しんだ漢籍の中の文句を当世風の相貌に造形し直したものに辿り着くことはごく自然な道筋を取れなくもないであろう。

吉川幸二郎氏による解説によると、「以上ずっと記録されて来た曾子の言葉のうち、この条はもっともすぐれる。あるいは『論語』全部の中でも、もっともすぐれた条の一つであろう。『士』の字の原義は、家老でない若手の官吏をさすが、ここでは、ひろく教養のある人間と解していいであろう。[63]」とあるように、同箇所は『論語』の中でも人口に膾炙した部分であるようだ。さらに同氏による「死而後已」の部分の解説によれば、「……人間は、生きているかぎり、使命をもっており、その使命は、死にいたるまでは、解消されないというのは、儒家の人道主義の積極性を、よく示す。[64]」とあるように、これは地上において使命を全うするために最後まで努力し続ける態度を指すようである。果たしてシェイクスピア語彙辞典を作成する「任は重く」、またそこに至るまでの

「道は遠い」ものだし、任を果たすには「弘毅」であることが求められよう。漱石は言外にほかならぬクレイグがそのような弘毅なる士であることを読み手に訴えようとしたのではあるまいか。クレイグの荷なう任はたとえようもなく重く、かつそれは「仁」の実践であったのだ。

魯迅はこの部分を一九二三年六月に上海商務院書館から出版された『現代日本小説集』の中の「克萊喀先生」では「是尽做倒死的呵[65]、」と訳している。それはこの部分が会話体であること、また魯迅にとって儒教は人間を抑圧する体制側の道具であったことなどから、『論語』の中にある言葉を敢えて避けてこのような簡明で力強い口語的表現を用いたのではないのであろうか。少なくとも魯迅がクレイグのこの語を見て『論語』「泰伯」の中の文句を想起することはなかったなどとは断言出来ないのではないか。

わたくしはかつて、ちくま文庫版「夏目漱石全集」全十巻を二度、三度にわたり目を通したことがある。しかし、「クレイグ先生」は、まったく印象に残らなかった。今さらながら自らの読解力のなさを痛感する。今回漱石の「クレイグ先生」という作品の重みのほどを学ぶきっかえを与えてくださった平川祐弘氏に衷心より感謝するものである。路傍に石ころがごく普通に転がっている。その下によく見ると、そこにはよく見なければ気づかない宝石の原石が隠されていたかのようであった。

以上、平川氏の高論を頼りに覚束ないまま漱石の「クレイグ先生」の文章を辿ってみた。漱石の「クレイグ先生」と魯迅の「藤野先生」の関係如何についても平川氏の『夏目漱石』、特に第三章「魯迅と漱石先生」に具体的にして詳細な議論が展開されている[66]。最早特別述べることはなく、高論からすれば贅言と繰り返しにしかすぎないであろうけれども、些か愚見を列ねてみたい。クレイグの遺稿は没後に出版されることはなかった。クレイ

グの遺稿が出版の暁を見ていたら、世間のクレイグに対する評価は変わっていたであろうか。或るいはそうかも知れないし、或いはそうでないかも知れない。しかし、クレイグにとってそのような世間的評価はどうであってもよかったのではないのであろうか。クレイグは前掲平川氏の『大英伝記辞典』の抄訳によれば、北アイルランドのデリー州の教会で副牧師の任にあったジョージ・クレイグの次男として生まれている。[67] わたくしは平川氏が訳されたルーカスの「葬式」という文章[68]を読ませていただいた。そのとき感じたことは、彼の生涯は新約聖書「コリントの信徒への手紙　一」十三章六節「不義を喜ばず、真実を喜ぶ。」（新共同訳）という言葉に集約されるのではないかということであった。この言葉を素直に実践した彼の行動は「ドンキホーテ的」と解されてしまうことが多々あったのではないかと思う。吉川幸次郎氏の先述の解説にあるように、彼は生涯ただ使命を全うすることに集中したのではなかったか。彼は自らの信念を生き抜いた市井の名もない一個人であったのである。無名であれ、貴い人生であった。漱石の眼差しはそこにあったのではないであろうか。

その同じ眼差しが魯迅の「藤野先生」にも貫かれているとわたくしは感ずるものである。魯迅は「藤野先生」の終わり近くに次のように記す。

他的性格、在我的眼里和心里是偉大的、雖然他的姓名并不為許多人所知道的。[69]

先学の名訳を踏まずに拙訳をお許し願いたい。「彼の人となりはわたしの眼の中、心の中に偉大なものとしてある。彼の姓と名が多くの人々にさのみ知られてはいないにせよである。」となるであろうか。「并」という一字の重さを痛感する。

魯迅は仙台医専にて解剖学者の藤野厳九郎に出会った。彼もまたクレイグと同じく無名の一市民ではなかった

であろうか。藤野との出会いの経験を通して魯迅は漱石の「クレイグ先生」の中に登場するクレイグに懐かしさに似た親しみを覚えることが出来たのかも知れない。ただ、魯迅の「藤野先生」が漱石の「クレイグ先生」の「創造的模倣」であったのかどうか、わたくしにはそれを判断する力量は毛頭ない。けれども気高い名もない一個の人間の生き方への共感が一九〇九年に世に出た漱石の「クレイグ先生」を読み、一九二三年にその翻訳を公にし、一九二五年に「藤野先生」を書き上げるまで、魯迅の心の奥深くに伏流水の如くあり続けたことは確かであるような気がする。

注

(29) 講談社「人類の知的遺産」第六十九巻『魯迅』（一九八〇年）「まえがき」、三頁。同「まえがき」によれば、同書は「魯迅と新しい読者をつなぐきっかけをつくるために、その金属性の光りをおびたことばを、切りきざんで並べかえてみたものにすぎない。」（同頁）と謙遜されるものの、実はそれ以上の中身の濃い入門書以上のものではないかと憶測する。「Ⅰ　魯迅の思想」、「Ⅱ　魯迅の生涯」、「Ⅲ　魯迅の著作」、「Ⅳ　魯迅以後―記念と交流」の四部構成になる。

(30) 同書、三三五頁。

(31) 平川祐弘『夏目漱石』講談社学術文庫、一九九一年、四五八頁。

(32) 同書、一五三頁。

(33) 同書、一七九頁。

(34) 同書、一五八頁。

(35) 今村与志雄『魯迅と伝統』（勁草書房、一九六七年）「あとがき」（五二九頁）。

(36) 平川氏前掲書、一五八―一五九頁。

(37) 今村氏前掲書、二五三頁。

(38) 同書、二五三頁—二五四頁。この箇所に関しては平川氏の引用部分は、「魯迅は漱石に対し、同病相憐れむというような切なる共感を持っていたのであろう。」である。

(39) 藤井省三『魯迅事典』(三省堂、二〇〇二年)によれば、魯迅はニーチェに関しては「…東京時代にイギリスのロマン派詩人バイロン、シェリーらを反抗する詩人と高く評価し、ニーチェに深い関心を抱いて『ツァラトゥストラはかく語りき』の序説を訳してもいる。」(二三九頁)ということである(「察拉図斯忒拉的序言」一九二〇年六月一日『新潮』月刊)。またドストエフスキーに関しては「ツルゲーネフ、トルストイ、ドストエフスキーについては翻訳しなかったが、しばしばエッセー等でその名に言及している。特にドストエフスキーについては…青年時代の読書で『敬服すれども、どうしても愛し』えなかった」(二三八頁)ところの作家の一人—もう一人はダンテ—であったようである。学習研究社『魯迅全集　8』に収められた「韋素園君の思い出」(今村与志雄訳)の中に、「壁にはドストエフスキーの大きな画像が一幅かけてあった。この先生をわたしは尊敬し、敬服していた。だが、わたしは彼の冷静なまでに残酷な文章を憎んだ。彼は精神上の責苦を準備して、不幸な人を一人一人つれて来て拷問して我々に見せた。」(八十二頁)とあった。他方、平岡敏夫・山形和美・影山恒男『夏目漱石事典』(勉誠出版社、二〇〇〇年)には、漱石におけるニーチェ、ドストエフスキーの関わりについて記されている。ドストエフスキーに関しては影山恒男氏が二二八—二二九頁に、ニーチェに関しては永野宏志が二五九頁に書いている。前者の「ドストエフスキー、フョードル・ミハイロヴィチ」の項に付された参考文献の森田草平『夏目漱石』(筑摩書房、一九六七年)中の「漱石とドストエーフスキ」と樋谷秀昭『増補版　夏目漱石論』(河出書房新社、一九八三年)の中の「漱石とドストエフスキー—病理・文明・小説」に目を通してみたが、漱石のドストエフスキー文学への関心の質何如についてはよく分からなかった。また、後者の「ニーチェ、フリードリ・ヴィルヘルム」の項には「その中で、『超人』に焦点をあてたニーチェ作品の非道徳的、美的解釈に漱石は当初から違和感を抱いていた。」(二五九頁)とある。これらによれば、漱石はドストエフスキーとニーチェに対して共感或いは傾倒というほどの関心は持ち合わせていなかったことになるのではないか。

(40) 平川氏前掲書、一五九頁。

(41) 漱石の「クレイグ先生」については、ちくま文庫『夏目漱石全集10』(一九八八年)所収の『永日小品』の中のもの(一四四—一五四頁)に拠った。また、魯迅の翻訳「克萊喀先生」については、『魯迅譯文集』第一巻　人民文文学出版社(一九五九年)所収のもの(四三八—四四五頁)に拠った。

(42) 前掲『夏目漱石』、五七―五九頁。
(43) 同書第一章「夏目漱石とクレイグ先生」、九一―九二頁。
(44) 同書同章、九四頁。
(45) 前掲ちくま文庫『夏目漱石全集10』一四六―一四七頁。
(46) 同書、一四八頁。
(47) 同書、同頁。
(48) 同書、一四八―一四九頁。
(49) 同書、一五一―一五二頁。尚ここに記したもののうち、「先生は…あるまいと思う。」の部分は平川氏『夏目漱石』の八二頁に引用されている（但し、平川氏の場合は歴史的仮名づかいであり、より厳密である）。
(50) Ⅲ「版本」§五『一九―二〇世紀の版本―理論と実践』荒井良雄他編『シェイクスピア大事典』日本図書センター、二〇〇二年、一七三。
(51) 前掲『夏目漱石』、八二頁。Harold Jenkins 編（一九八二年）にアーデン版『ハムレット』の「序」（Preface）によれば、最初の版はダウデン（Dowden）の手になったものである。（Methuen, 1982, p.vii. ―佐野俊彦先生寄贈。愛知大学豊橋図書館所蔵）。また、愛知大学豊橋図書館には寄贈本として重厚な味わいのある紅い表紙のクレイグ編集になるアーデン版『リア王』が所蔵されていた（*The Tragedy of King Lear*, London: Methuen, 1901）。おそらく漱石が手に取って重宝した版と同じものであろう。表題紙の右上に「寄贈」の印があるのみで、寄贈者の名前が分からない。
(52) 前掲ちくま文庫『夏目漱石全集10』、一五二頁。
(53) 同書、同頁。
(54) 「シュミット」高橋康也他編『研究社　シェイクスピア辞典』二〇〇〇年、三三二頁。これによれば、*Shakespeare-Lexicon* は一八七四年から一八七五年にかけて出版された。二巻本で、一九六二年出版のものが愛知大学豊橋図書館に所蔵されている。
(55) 前掲『夏目漱石　全集10』一五二頁。
(56) ここは或いは「暴虎馮河」に替えて「ドンキホーテ」としたほうがよいかも知れない。前掲『夏目漱石』第四部「クレイグ先生ふたたび」の箇所に収められた平川氏訳になるルーカスの「葬式」という文章には、「そんな調子だから、ロン

ドンの乗合場所の車掌なら一人ならずこの頑健でドン・キホーテ的乗客が、誰か知らない女客の肩を持って奮闘したことを覚えているはずである。」（四一三頁）とあるからである。

また、平川氏は別に「学者的ドン・キホーテ」という項（四二四―四二八頁）を設けてその中で、「だがよく読むと漱石もクレイグ先生をドン・キホーテとして、少なくとも学者的ドン・キホーテとして見ていたことだけはすぐわかる。」（四二六頁）と述べている。ルーカスと漱石のクレイグ像がドン・キホーテという一点において交なり合うのであろう。

(57) 前掲ちくま文庫『夏目漱石全集10』、一五三頁。
(58) 前掲『夏目漱石』第一章「夏目漱石とクレイグ先生」、九三頁。
(59) 金谷治訳注『論語』岩波文庫、一九六三年、一〇九頁。
(60) 同書、同頁。
(61) 同書、同頁。
(62) 前掲ちくま文庫『夏目漱石全集10』、六九七頁。
(63) 吉川幸次郎監修『論語（上）』（中国古典選3）朝日新聞社、二六四―二六五頁。
(64) 同書、二六五頁
(65) 前掲人民文学出版社『魯迅譯文集』第一巻、四四五頁。出版年等については「第一巻説明」（二頁）に拠った。
(66) 前掲『夏目漱石』、一五二―一八三頁。中でも「刺戟伝播」の箇所では、「外国留学中に出会った先生の思い出を語るという共通の主題によって結ばれた『クレイグ先生』と『藤野先生』は、形式の面でも、話の筋の運びの面でも、スケッチの技法や作品中のユーモアという面でも、また読後感や余情といった面でも、いくつか共通する特徴を持っている。」（一六〇頁）という見解が提示され、続けてそれを裏づける具体的な例が挙げられている。
(67) 同書第一章「夏目漱石とクレイグ先生」、五七頁。
(68) 同書第四部「クレイグ先生ふたたび」、四一〇―四一六頁。尚、同書の四〇八頁に言及してある棚橋克弥「『クレイグ先生』異聞」（『静岡大学　教育学部研究報告』人文・社会学篇第三五号、一九八四年）の一三〇―一三三頁にも「友を送る」と題した棚橋氏による翻訳が掲載されている。
(69) 『魯迅全集』（人民文学出版社、一九八一年）第二巻、三〇七頁。

追記　一

わたくしはクレイグについて知るところがあまりに少ないので、拙文を書き終えた後に平川祐弘氏『夏目漱石』（講談社学術文庫）の中に引用され、或いは言及されている文章の原文について出来るだけ当たってみることにした。*The Dictionary Of National Biography Supplement* 1901-1911, vol. I,Oxford University Press, 1912 (1976 reprint)（愛知大学名古屋図書館所蔵）, *The Concise Dictionary of National Biography.* Part II 1901-1970, 1982（愛知大学名古屋図書館所蔵）, *Oxfprd Dictionary of National Biography,* Vol.13, 2004（愛知大学豊橋図書館所蔵）, *The Times* microfilm（愛知大学豊橋図書館所蔵）, *Jahrbuch der Deutschen Shakespeare-Gesellschaft* Berlin-Schöneberg, 1907（名古屋大学中央図書館所蔵）, *The Spectator,* Vol.97, London, 1906（早稲田大学図書館所蔵）, E. V. Lucas, *Character and Comedy,* Methuen, 1907, E. Dowden, *Shakespeare, A Critial Study of His Mind and Art,* London, 1875 (1967 reprint)（佐野俊彦先生寄贈、愛知大学豊橋図書館所蔵）, E. V. Lucas, *Reading, Writing and Remembering,* Methuen, 1932 などがそれである。

これらの文章を読み進んでみると、次のようなクレイグの特徴が浮かんで来る。一つめは寛大でもの惜しみない精神である。Elizabeth Lee は *Shakespeare Jahrbuch* (1907) の中で、"His stores of learning and his fine taste were always at the service of others, and the acknowledgements of his assistance printed in prefaces etc. would form a very long list. He inspired and encouraged many a humble student like myself to

undertake or continue work that would otherwise never have seen the light. All lovers and the students of English Literature are the poorer, now that his worldly task is done."('William James Craig.', 'Nekrologe.', p.235) とあるように、彼は溢れるほどの学識を多くの学究の徒に惜しみなく与えたのである。その恩恵に浴した数多い研究者の一人に漱石が位置したのであろう。

二つめは不義不正を許さない心である。クレイグと二十年ほど親交のあった下院議員の Stephen Gwynn は *The Spectator* No.4095 の 'LETTERS TO THE EDITOR' の中で、"All the twenty years that I knew him he was cinstantly invalided by some imprudence which in his younger days often took the form of battle. I never saw him actually fight, but I have restrained him from doing so, At college he was a notable boxer, without any natural advantage except a gnarled and twisted hardiness, and indomitable spirit."('The Late W. J. Craig', Saturday, December 22, 1906, p.1040) とあるように、思慮を欠いた態度を取った相手に対しては自らの力の何如を忘れて蟷螂の斧を振るって強者に立ち向かっていく勇気が彼にはあったのである。その勇気とは不義不正を憎む純粋な心である。

三つめはユーモアを解する心である。Sidney Lee は *The Times* No.38206 の 'OBITUARY' —当日は他に Mr. T. D. Bolton, M. P. と Professer Dr. Carl Abel の訃報記事が掲載されているが、クレイグの記事が中心を占め、大きなスペースがさかれている。ほぼ前後一か月分の訃報記事に眼を通してみたが、クレイグの記事は小さくない—の中で、"A keen sense of humor made him alive to the comical character of situations which his tendency to absent-mindedness and his singularly difficult handwriting occasionally provoked. His closest

friends were men sharing his own tastes. But he was at home with everybody." (Mr. W. J. Craig', Tuesday, December 18, 1906, p.11) とあるように、自ら招く苦境に対してユーモアをもって乗り切るのである。英文学者の福原麟太郎は「英国的笑い」という文章の中で、「英国人のヒウマーは転身のピヴォットである。英国人が現実家であるゆえに備えている保身の持薬である。」（『福原麟太郎著作集11』研究社、一九六八年、一一二頁）と述べている。恐らく、クレイグのそれもこれが当てはまるのではないであろうか。漱石がクレイグの家に下宿したいと言ったとき、「君こういう家なんだから、どこへも置いて上げる訳には行かないよと断るかと思うと、たちまちワルト・ホイットマンの話を始めた。」（ちくま文庫『夏目漱石全集10』一四九頁）とあるように、にべもなくはねつける代りに突然ホイットマンが滞在した話を繰り出した。棚橋克弥「『クレイグ先生』異聞」『静岡大学教育学部研究報告』人文・社会科学篇第三六号（一九八五年）の「注」（1）（一三三頁）に記された福原麟太郎『夏目漱石』（荒竹出版、一九七三年）の「対談」「荒正人氏と語る『クレイグ先生・漱石研究の現状』」の中で荒正人は「ホイットマンがクレイグのところへやってきたということを聞いたというのですが、そういう事実はなかったようです。わたしは夫人の間違いかと思って、奥さんのほうも調べたんですが、夫人もきいていませんね。」（二三六頁）と述べている。しかし、これはそのような事情を英文学の知識の浅からぬ漱石であるならば当然熟知しているはずであろうとクレイグのほうで判断してユーモアの材料として語ったと解する余地は残されていないのであろうか。

四つめは彼がアイルランド人であるという自己意識を有していたことである。S. Gwynn は前掲 *The Spectator* の中で、"A Londonner by adoption, familiar for long years in the British Museum reading-room

and the Savage Club (to name two of his chief haunts), he was yet more at home on an Irish mountain or lake among Irish countryy people, gentle or simple; and with all his traditional Unionism, he was as truly and unmistakably Irish, and as proud of his country, as any man I ever knew," (p. 1040) とあるように、彼のおもな生活の舞台はイングランドのロンドンであったわけなのであるが、彼の心は故郷アイルランドに留まっていたのである。

五つめは神の摂理に身を委ねた生き方である。E. V. Lucas の珠玉の随筆 'A Funeral' の冒頭に、"It was in a Surrey churchyard on a grey, damp afternoon-all very solitary and quiet, with no alien spectators and only a very few mourners; and no desolating sense of loss, although a very true and kindly friend was passing from us." (*Character and Comedy*, p.14) とある。親しい友数人による心のこもった葬送、そこに何らの喪失感がないとある。しかし逆に親しい友のみであれば喪失感は深まるのではないか。平川氏の「クレイグ先生ふたたび」には「…『祈禱書』の「墓地で死者を埋葬する際に」唱える語句をそのまま実証しているかに思われた。」(前掲『夏目漱石』、四三〇頁)とあった。わたくしは後述の日本聖公会退職司祭垣内茂先生に、"In the midst of death we are in life, just as in the midst of life we are in death; it is all as it should be in this bizarre, jostling world." (p.14) について『新禱書』の引用箇所をお尋ねしたところ、現在英国聖公会の葬送式で用いられる式文の英文は、"In the midst of life we are in death to whom can we turn for help, but to you, Lord, who are justly angered by our sins?" ということであった。英国聖公会で葬送式を司会された経験をお持ちの垣内先生によれば、これは墓地までの行進のときに歌われ誦えられるものである。葬列者の Lucas はこ

れを聞いて“In the midst of death we are in life,”という文句が浮かんだのであろう。これはほかならぬクレイグの死について語っているのではないか。Lucasは神の生命の中に死して後も生かされているクレイグの姿に出会ったのである。それはクレイグの生涯が純粋な心で神に信頼したものであったがゆえにこそ、神がその地上での生涯に報いたことのしるしであるのかも知れない。ことほど左様にLucasの文章の中でクレイグは今尚生きているように書かれている。少なくともわたくしにはそう思われる。

クレイグ関係の資料の調査に関しては愛知大学名古屋図書館の職員の方に一方ならぬお世話になった。記して感謝したい。

追記　二

クレイグにとってライフワークはシェイクスピア語彙辞典の編集であった。E. V. Lucasが‘A Funeral’という文章—訳せば「或る葬送」となろうか—の中で、“His own *magnum opus* he left unfinished; he had worked at it for years, until to his friends it had come to be something of a joke.”(*Charactor and Comedy*, Methuen, 1907,p.15) と書くように、その仕事は生前、友人たちの間で諧謔の種になるほど長い年月が経過しても結実には至らなかった。言わば嘲笑の対象となっても焦らず完成に向けて編集の手を早めることをしなかった。仕事の精粗の差異が生ずるのを慮ったのであろう。そこに、「いつだか分かるものか、死ぬまでやるだけの事さ」とい

う言葉が生まれたのであろう。ここには自分の仕事を神から与えられた天職と受けとめ、世間的な評価に捉われることなくひたすら神の眼差しを意識してなすべきことをなそうと志す神への信仰が土台としてあるように思われてならない。

一九一二年版の『大英伝記辞典』「附録」第一巻のクレイグの項の最初の段落は、"CRAIG, WILLIAM JAMES (1843-1906), editor of Shakespeare, born on 6 Nov. 1843 at Camus juxta Bann, known also as Macosquin, co. Derry, was second son of George Craig (1800-1888), who was then curate of that place and from 1853 till his retirement in 1880 was rector of Aghanloo in the same county. Craig's mother was Mary Catherine Sandys (1803-1879), daughter of Charles Brett of Belfast and of Charleville, co. Down." (p.434) とあるように、クレイグは父ジョージ・クレイグ、母メアリー・サンディズの次男として生まれた。そのとき、父のジョージ・クレイグはロンドンデリー州の Camus juxta Bann にある教会で 'curate' として奉仕していた。'curate' は Samuel Smiles の *Self Help* の第二章のウィリアム・リー William Lee を扱ったところで出て来、中村正直は「牧師」と訳している。ジョージ・クレイグは北アイルランドのプロテスタント教会の教職にあったわけである。そして、一八五三年から一八八〇年まで同州の Aghanloo にある教会の 'rector' として奉仕した。他方、母メアリー・サンディズはダウン州のチャールズ・ブレットの息女であるとわざわざ記してあることからすれば、彼女は地方の名家の出身であるということであろう。漱石はクレイグが常日頃格式ばった服装をしなかったというようなことを書いている。しかし、ルーカスの *Reading, Writing, and Remembering* の五六頁右隣りに載った写真のクレイグは白い襟のシャツを着、ネクタイをしめて正装した姿で写っている。鳩のような優しい

目をし、この世の汚れを知らぬいかにも上品そうな良家の御曹司というような面持ちである。同書には他の人物の写真も幾枚か載せられているが、このような印象を与えるようなものはないように感ぜられる。気品のあるその姿を見れば、『大英伝記辞典』の中に書かれた両親についての記述もうなずけるのではないであろうか。ルーカスは'A Funeral'という文章の中でクレイグのことを'a man of so transparent a character'（前掲書、一五頁）―訳せば、「かくも澄みきった心根の持ち主となろうか―と評しているが、さもありなむと思わしめる写真である。両親が神を信じる嘘偽りのない日常生活を生きていればこそ、そのようなクレイグの性格が自ずと形成されて行ったのではないであろうか。神に心の奥底から敬度な祈りを捧げる両親の後ろ姿を見て、クレイグの内面世界の土台が形成されたのだとわたくしは思いたい。

とはいえ、わたくしは父ジョージ・クレイグが務めたとされる'curate,'や'rector'が具体的にどのようなものを指しているのか、また彼がどの教会に属しているのかもよく分からなかった。せん方なく昨年秋に日本聖公会東京教区事務所に大学の研究室からお電話すると、日本聖公会文書保管委員の諫山禎一郎氏がお出になられて、日本聖公会横浜教区退職司祭で元日本聖公会文書保管委員長でもあられる垣内茂先生をご紹介くださった。垣内先生は一九六〇年代に二年ほど英国に滞在され英国聖公会でご奉仕をされたご経験をお持ちの方であられた。

こちらから連絡を取る間もなく垣内先生から忝くも連絡を頂戴した。わたくしは二つの教職についてお尋ねしたところ、これらの教職は日本聖公会にはなく、'curate'とは正式に神学校教育を終えた者が三年ほどの単位で'rector'のもとで教会で奉仕する役職のことであり、また'rector'とは三年単位で三つくらいの教会で'curate'を務めた後に就く役職であり、教会から一定の収入が保障されるものであるということであった。わたくしは何

よりも聖公会は地域により制度が異なることに新たな発見の驚きと喜びを禁じ得なかった。

聖公会はカンタベリー大主教を地上の教会の頂点とするようなピラミッド形式の位階制組織でなく、「すべての主教は対等」（塚田理『聖公会の伝統を探る』聖公会出版、二〇一二年、五二頁）という見解に立ち「各国の聖公会が独立した組」（五三頁）織、すなわち管区と認められるところの管区制を取っているとすれば、ジョージ・クレイグはどの教会に属するかということ、そのことの意味は重要性を益すであろう。垣内先生はこちらからお頼みしないうちに自ら調査をしてくださった。垣内先生は英国聖公会の United Society for the Propagation of the Gospel とアイルランド聖公会の Representative Church Body の関係にご連絡を取ってくださった。その後ＵＳＰＧの方から一八六〇年代後半から一八八四年までの幾つかの版の *Crockford and the Clergy List* を見てもジョージ・クレイグの名前は認められなかったという旨の回答があったということを垣内先生から知らされた。他方、ＲＣＢの方からジョージ・クレイグの名前が見つかったという回答があったことを知らされた。垣内先生はここでもわたくしのお頼みする先に先方にわたくしから連絡することが出来るようにお手配してくださり、そのお蔭で直接連絡を取ることが出来た。ＲＣＢ附属 Library にお勤めのスーザン・フッド先生 Dr. Susan Hood は Rev. James B. Leslie, *Derry Clergy and Parishes* (Enniskillen, 1937) のタイトルページと George Craig の小伝の載った九一頁を添付ファイルにして電子メールで送ってくださった。かくしてわたくしはそこにアイルランド聖公会の教職の任にあったジョージ・クレイグ司祭の名前を確かめることが出来たのである。同小伝によれば、ジョージ・クレイグは商人ジョン・クレイグ John Craig を父とし Donegal 州に生まれ、Gwynne 氏のもとで教育を施され一八一五年に十五歳のときダブリンのトリニティ・コレッジ

（Trinity College Dublin）に入り、一八二〇年に学士号を、一八三二年に修士号を取得している。一八二三年に執事（deacon）の按手式を、一八二四年に司祭（priest）の按手式を経て、一八二三年から一八五三年までデリー州のCamus-juxta-Bannで'curate'として奉仕し、一八五三年から一八八一年までAghanlooで'rector'として奉仕した。妻のメアリーは一八八〇年に司祭館で七十七歳にて天に召されている。

ところで垣内先生によればこのアイルランド聖公会、すなわちThe Church of Irelandは英国の一部の北アイルランド及びそれとは別の政治単位の南アイルランドのアイルランド共和国を一つの教会管区としているということであった。つまり、北アイルランドは政治単位としては英国と同じ組織に属するが、宗教単位としては南アイルランドと同じ組織に属すという複雑な地域性を有するのである。息子のクレイグはこのような特徴を有するアイルランド聖公会の信仰の遺産の継承者として位置づけられるべきではないであろうか。

このようにクレイグの父ジョージ・クレイグ司祭に関する調査では垣内茂先生に負うところ大であった。特筆大書して垣内茂先生ならびに先生をご紹介くださった諫山禎一郎氏並びに貴重な知識を提供してくださったスーザン・フッド先生Dr. Susan Hoodに感謝致したく思う。

追記　三

これらのことを踏まえてもう一度「藤野先生」のことを考えてみたい。

それは言葉の問題である。「一将書放在講台上、便用了緩慢而很有頓挫的声調、向学生介紹自己道：〝我就是叫作藤野厳九郎的……。〟後面有幾箇人笑起来了。」（人民文学出版社『魯迅全集』第三巻、三〇三頁）とあるように、藤野厳九郎の口調はよどみなく話すにのとは裏腹のゆっくりとした、しばしばつっかえるものに魯迅には聞こえ、学生の中には笑い出すものさえいたようである。他方、漱石も「先生は愛蘭土の人で言葉がすこぶる分からない。少し焦きこんで来ると、東京者が薩摩人と喧嘩した時くらいにむずかしくなる。」（ちくま文庫、一四六頁）とクレイグの言葉がアイルランド式の発音でイングランドの人々の話す言葉と調子が大きく異なることを述懐する。

藤野厳九郎は福井県の人である。高等教育を名古屋の愛知医学校で受け、彼の言葉は名古屋弁の影響や干渉を受けた福井弁であった。この点について「藤野厳九郎記念館」を管理運営するあわら市役所総務課の今田直美氏についてお尋ねしたところ、藤野厳九郎の地元の言葉は「福井弁」と言ってよく、小説「藤野先生」の中の「ひとく抑揚のある口調」（立間祥介訳〔学研『魯迅全集』第三巻、一七〇頁〕）という描写と一致するむねの回答を得た。或いは更に藤野厳九郎の口吻は愛知医学校の教師、とりわけ恩師に当たる奈良坂源一郎の影響を受けているものかも知れない。

東北の仙台の地で福井弁を聞くことは稀であったろう。それは嘲笑の材料であってはならないはずだ。にもかかわらず、藤野厳九郎は言葉の差異によって余所者として疎外されたのではないであろうか。他方、クレイグの場合は言葉の差異によって少なくとも彼がイングランド生まれの人間ではないことだけはイングランドの人々には知られたことであろう。それ以外のことは分からない。憾むらくはわたくしはイングランドにおける少数言語

の社会言語守的考察をするだけの知識を具有しない。

魯迅の「藤野先生」の文章には学生からの笑い声が言葉の差異によるものであるとははっきり書かれていないけれども、無関係ではあり得ない。果たして学生の笑い声に対して藤野厳九郎がどのように対応したのか、「藤野先生」には書かれてはいない。笑い声はいうところの「物以希為貴」、つまりものは稀少をもって価値ありとすの逆ではないか。異郷の人藤野厳九郎もまた東北仙台の地で異邦人としての孤独と寂寥の何ほどかを受け止め独り静かに耐えていたのではあるまいか。